

## 実践報告

# 学びあいをデザインする

## --- 自律的相互学習のための英語授業のデザイン ---

### **Importance of Providing Listeners and Readers for College Learners of English**

原田 康也

Yasunari HARADA

前坊 香菜子

Kanako MAEBO

早稲田大学情報教育研究所

Institute for DECODE

Waseda University

早稲田総研インターナショナル

Waseda Soken International

## 概要

本稿では早稲田大学法学部で第一著者が担当する 1 年生必修英語の授業（自動登録）を中心とする自律的相互学習を目指した授業実践について報告し、この授業がなぜ可能となっているかを検討する。この授業の中心をなす「応答練習」で授業設計者が受講生に提供したのは、コミュニケーションのきっかけ（質問）と聞き手である。また、文章作成において重要な働きをするのは、他の受講生のうち 5 名が読む、という意識である。このように、コミュニケーションの訓練においては、発信の訓練のみならず、受信者ならびに交互作用を提供する学習環境デザインが必要であると考えられる。

## Summary

Communicative approach has been emphasized in the teaching and learning of English in Japan but the result has not been too successful. In this presentation, the authors will describe a classroom implementation for the first-year students of the undergraduate School of Law of Waseda University, in which students engage in various autonomous group activities using English including what we call “oral response practice.” In this exercise, students are organized into groups of three, and one will read aloud twice a question printed on a piece of paper, another will answer the question for 45 seconds and the third will keep time and shoot the interaction with a digital camcorder. The students will take turns, and after 10 questions are read and answered, the students will be given half an hour to write a 400-word essay based on the oral interaction. They will revise the essay by next week and bring six printed copies. One copy is submitted to the teacher along with the file but the remaining five copies are exchanged within groups of six students, and the students will read each others' essays and comment on them. The organization and seating of the students will change every week. In this class activity design, the most important feature is that students will become aware of the listeners and readers.

## ■キーワード■

自律的学習、相互学習、授業のデザイン、応答練習、デジタルカメラ、

## 1. 「ぼくたち」がなんとかしなければ確実にクラスが崩壊するのです。

新入生が学年最初の授業に出てくるときにはクラスメートの顔も名前も知らず、担当教員の名前も教室の番号も配布された資料でしかわからないような状態である。授業開始前にいまから自分が受ける授業がこの教室なのかどうかよくわからないまま入ってくると、英語の授業のはずなのに受講生より数多くのコンピュータがならんでいる。キーボードやマウスの間にはマイクやビデオカメラが置いてある。書画カメラからプロジェクタ経由で大型スクリーンに投射された出席簿で自分の出席簿番号を確認し、学生用 PC モニタと一緒に並んでいる教材提示用モニタで自分の着席位置を確認してからうろうろと歩き回って周りの学生に教えてもらいながら席に着くと授業開始時間となり、教室の前の方で機械を操作していた人物がマイクを持って説明をはじめ、試験用紙を配り始める。英語リスニング・スピーキング自動試験の問題用紙だというのが、その場で回答するのではなく、あらかじめよく読んで辞書を引いて声に出して読む練習をしてから電話をかけるようにとかいうよくわからない説明をするので頭の中がぐるぐると回転し始める。しばらくすると担当教員がカードを配って回り、立ち上がって3人一組で質問を読み上げたり回答したりして、それをマイクとビデオを使って録画するようにと説明する。英語の質問にいきなり英語で答えないといけないけれど、単語が出てこない。答えを思いつかない。練習が終わるとパソコンを起動してワープロで文章を書き始める。400語の英作文、という指示だけれど、何を書いたらいいのか思いつかない。試験を受けるのと作文を完成させるのが宿題、というのでたいへんな時間をかけて作文を完成させるが、電話で試験を受けると何をいつているのか英語がさっぱりわからない。次の週になると座席配置がまた変わっている。授業が始まってからも着席してコンピュータに向かって続けて作業する時間は10分か20分ほど、教室の片隅に運び込まれた多読用図書を借り出したり返却するために席から離れ、ビデオカメラとマイクを使ったグループ活動のために立ち上がり、着席しても他の受講生の作文にコメントを書き込んだり、背中合わせの4人で座ったまま情報交換するなど、作業の切り替えについていっただけで疲れ切ってしまう。

## 2. 習い始めてから6年間、「わたし」はずっとそうやって過ごしてきた。

中学・高校でコミュニケーションを重視する英語教育を受けてきているはずのいまどきの大学新入生であっても大学の英語の授業というと90分淡々と教科書を読んで訳していくという古典的なイメージを抜きがたく持っているのか、担当クラスの1年生は新学年の授業が始まってからしばらくのあいだは授業の進め方にあっけにと取られている模様である。

大学入試で高得点を得ることを最大の目的として英語を学習してきた高校生・大学受験生は、入学する大学が決まった時点で英語学習の最大の動機付けを失うことになる。近年では、就職活動に際して一定のTOEICスコアが求められるとか、ロースクール受験に際してTOEICやTOEFLなどの高得点が求められるということを動機付けとして大学受験と同じような態度で英語学習を継続する学生もいるが、そのよしあしはまた別途検討を要する事項である。

大部分の学生は、学年はじめの授業でクラスメートに自分を紹介することを主な目的とした応答練習のあと自己紹介の英文を30分程度で行おうとしたとき、1文か2文を書く程度で終わってしまう。近年では、大学入試に向けてパラグラ・フライティングや5段落エッセーの基本的構成について学んでくる学生もいるので、30分という時間で50語から100語近く書ける新入生もおり、英語圏で高校を過ごしたものは200語以上書けるのが通例であるが、こうした学生はまだどちらかというとな例外的である。こうした状況の一つの理由は、コンピュータ教室でワープロソフトを用いてキーボードから英文を入力しているため、中学・高校の英語学習で紙に鉛筆で英文を書いた経験しかない学生にとってはタイピングそのものが必ずしも容易でないという側面が強い。多くの学生はローマ字・かな漢字変換で日本語を入力することに慣れている。また、紙に鉛筆で英単語を書くことに大きな支障はない。しかし、そのことは、紙に鉛筆で書ける英単語をキーボードから迅速に入力できるということを意味しない。とはいえ、コンピュータの利用やタイピングが最大の問題点ではない。学生の様子を見ていると、少し書いては消し、少し書いては消し、2文ぐらいになると全部消してからまた書き直すというようなためらいと試行錯誤から抜けられない場合が圧倒的に多い。

### 3. 最初から「わたし」しかない

教室に到着した学生は座席配置表に基づいてその日の座席を確認し、PC を起動している間に前回の授業時に借り出した多読用図書を返却し、新たに一冊借り出しエクセルの読書記録を更新してファイルを提出し、宿題の作文を Word のファイルで提出し、さらに宿題のプリントアウトを提出する。ここまでの所用時間 10 分程度となる。提出物が出揃ったところで、横並びの 3 人一組で応答練習を進める。この応答練習では、担当教員が用意した質問を印刷した名刺大のカードを各グループに 10 枚渡し、3 人のうちの一人がこれを読み上げ、もう一人がこれに回答し、もう一人がタイムキーパーとして進行管理とビデオ撮影を行い、一問回答するごとに相互評価用紙に評点を記入して役割を交代する。この練習に 25 分程度を要する。隔週で応答練習の内容を思い出ししながら、300 語から 400 語を目指して Word で文章作成を進める作業に 30 分ほどを費やす。大部分の学生にとって 30 分でこれだけの分量の作文を仕上げることが難しく、次の授業までに作文を完成させ、ファイルとプリントアウト 6 部を用意してることが宿題となる。多くの受講生はこれに 1 時間から 4 時間ぐらいの時間をかけてくる。作文を書いた次の週では、新たな作文を書くかわりに、横並びの 6 人で相互に作文をチェックし、内容についてコメントを記入し、採点をする。この作業に 20 分前後を要する。コメントに基づいて作文を修正し、次の週にファイルとプリントアウトを提出する。文章作成ないし作文の相互チェックのあと、10 分ほどの短い時間で web 上の CNN のビデオニュースクリップをそれぞれの学生が自由に選んでいくつか視聴し、そのうち興味を持った話題について PowerPoint のスライド 2, 3 枚にまとめ、最後の 5 分ほどの時間で背中合わせの 4 人ずつのグループで順番に紹介する。学期の初めにはそれぞれの作業に時間がかかり、ニュースクリップ視聴と情報交換の作業まで進めることはできない。授業の進め方と PC の利用の仕方に慣れるに従い、授業中の活動項目が増えていくことになる。秋学期には応答練習のあと文書作成に先立って、PowerPoint を使って応答練習を思い出しながらその日のトピックについて短い発表を行い、応答練習と合わせて文章作成に先立つウォームアップ練習としている。

### 4. 意思疎通に齟齬が発生するかもしれない

大学・学部等によっては、入学時の学生の英語学習到達度を内部または外部の試験により判定し、英語のクラス分けに利用しているが、筆者が英語を教える早稲田大学法学部では、さまざまな事情からこのようなレベル別のクラス分けは実施しておらず、一クラス 30 人弱の中には英語圏の学校で初等・中等教育を過ごして来た学生もいれば、英語が極めて苦手なまま大学に進学してきた学生もおり、たとえば TOEIC スコアで 300 点を下回る学生から 900 点を上回る学生までが混在している。

通例であれば英語運用力の大きく異なる他の受講生とのグループ作業に大きな不満を抱きかねない受講生も、座席配置（とそれに伴ってのグループの組み合わせ）が毎回異なることから、さほどの不満を持たずに一年の授業を終了する模様である。コンピュータのさまざまな基本的機能を多用するため、英語の運用能力が必ずしも高くなくてもコンピュータの利用法に秀でている受講生の活躍する場面が生じることも一つの要因かもしれない。

こうしたさまざまな英語学習経験を持つ学生に対して、1 年次には paragraph writing から始めて 400 語程度の essay writing の基礎を身に付け、graded readers などを利用した多読を促し、基礎的な語彙が不足している学生には e-learning を活用した自学自習を促し、2 年次の授業でグループ活動に基づいて英語で発表を行い、その内容を 2000 語程度の英文に取りまとめるような活動を無理なく行えるための準備を行っている。

新入生の多くは入学時には 30 分という時間で 50 語から 100 語ですら書くことに困難を示すが、毎回の授業で文章作成と相互チェックを繰り返すことで、大部分の学生は春学期の終わりに 300 語、学年の終わりには 400 語程度の文章を限られた時間で書くことができるようになる。リスニング・スピーキングについても、電話による自動試験を受験した学生は一樣にこの試験全般について電話を使って英語の質問に対して英語で回答することが難しいと感じ、特に最後の自由回答設問については日本語であっても応答することが難しいだろうと感じたと報告するが、毎週の授業で一人 3 問から 4 問程度の質問に口頭で回答する練習を続けることで、英語の質問に対して 1 分近く英語での回答を続けられるようになる。

## 5. 「あなた」がここにいる理由

コミュニケーションをキャッチボールにたとえる説明をよく見かけるが、授業でキャッチボールを練習しようというときにボール一つとグローブ二つだけ用意して教員が教場に出かけるとしたら無謀というものであろう。学生をグループでの自律的学習活動に組み入れて授業を実施していく中で明らかになってきたことの一つが、学習資源としての他の受講生の存在の意義である。英語が必ずしも好きではなく、大学に入ってもうこれ以上勉強しなくてもよくなったと思っている受講生が毎週1時間から4時間もかけて作文を仕上げてくる最大の理由は、担当教員ではなく他の受講生（のうち少なくとも5名が）自分の書いてきた作文を読むということを予期しているからである。応答練習でカードに印刷された英語の質問を読み上げるとき、始めのうちは棒読みしていた学生も、そのうちどのように読むと相手にとって聞き取りやすく、答えやすくなるか考えるようになる。質問に答えるときも、どのような話題について話をするとグループの中の他の二人に面白がってもらえるか考えながら話すようになる。この授業が結果的にうまくいっている理由はさまざまにあるが、文章作成にあたっては読み手を提供し、応答練習に当たっては聞き手を提供することができたことが最大の理由であろうと考えている。

4月から5月の初めにかけては授業の準備と授業中の学生支援で忙しい。4月のうちはコンピュータやビデオカメラの使い方も含めて授業の進め方になじめない模様で、担当教員が教室の中を走り回りながら作業を支援する必要があり、授業の進み方も不十分なため気持ちの上で余裕がないが、6月ぐらいになると学生も何をすべきか授業の流れを把握するので少しは余裕が出てくる。11月のある日、自宅にいくつか用意してある時計の一つが50分ほど遅れているのに気づいたのは授業開始10分前のことだった。いつもは授業開始1時間前に研究室に入り30分前から教室で準備を進めるが、授業開始時にはまだ教室に到着していない学生も若干いて、その後10分ぐらいはざわざわとした雰囲気となっている。自宅を飛び出してタクシーで教室に向かったところ、授業開始後7分ほどたって教室に到着してみると、全員がすでに着席してコンピュータに向かって静かに作業を開始していた。いない方が勉強するの？

## 6. 「わたし」がここにいる理由

学期末ならびに学年末に英語の授業としての成果と感想を400語程度の英文にまとめて提出するという課題を課しているが、そのなかできわめて多くの受講生がこの授業を受講した結果コンピュータを使えるようになったと感じていることを（本来の課題からはずれることを承知しながら）あえて記載している。コンピュータ操作を身につけることは付随的な結果に過ぎないが、大学のコンピュータ・ネットワーク環境におけるPC基本的操作（特にWord・Excel・PowerPointの起動・基礎的な入力・編集ならびにファイル操作・ファイルへの命名法などを含めたドキュメント管理の基礎）への習熟と英語学習に必要なコンピュータ利用法（全角と半角の切り替え・英文キーボード入力への習熟・Wordにおける赤い波線と緑の波線への対応・つづり辞書と類義語辞書の利用・各種のweb-based trainingシステムの利用やオンライン情報資源の利用法への習熟など）が身についたことにより、受講前と比べて格段にコンピュータを活用することについて不安がなくなり、他の授業の準備やレポート作成において大学の提供するコンピュータとネットワーク資源を有効に活用するための心構えができていたことがよく理解できるような報告が多い。

一つの授業の中で学生のそれぞれが習得していくことが一人ずつ異なることはむしろ自然である。この授業の受講生の英語の運用力については、たとえばTOEICでは300点弱から900点以上まで大きな幅があり、授業によって獲得することは一人ずつ異なっている。英語の運用能力が大きく異なるのと同じように、コンピュータの利用についての慣れが異なる学生が混在しているが、相互に助け合って学習を進め、それなりに学びあっている。コンピュータの利用に自信がなく、機械を操作することがおぼつかなかった学生が、半年・一年の授業での経験から、機械を操作することに不安を感じなくなり、キーボードからの入力やファイル操作をためらうことなく進めることができるようになっていく。もともとコンピュータの操作が得意であった学生にとっては、そのこと自体について学ぶことは多くないかもしれないが、そうした学生にとっても、Wordの英文校正機能やPowerPointのアウトライン入力などは比較的目新しい事項であることが多い。